

法然門下における「弘願一乗」の究明と親鸞の「一乗海釈」

——「論書」としての『教行信証』への一視座——

藤元 雅文

はじめに

法然は、一乗・仏乗を含めた聖道門仏教への吟味批判を徹底しつつ、一切の衆生が同じく斉しく生死を超えていく本願念仏の教えを浄土宗として立宗し明確化する。親鸞は、法然による浄土宗の立宗を「真宗興隆」¹と仰ぎつつ、そこで明らかにされる教えを如来の本願によって、あらゆる機が斉しく普く成仏することのできる大般涅槃道、「誓願一仏乗」²として開顕する。

この法然、親鸞における一乗の実現という歴史的意義を考える時、看過し得ない事として、選択本願に基づく念仏往生の仏道を一乗の教えとして言明する法然門下の存在がある。具体的には、隆寛（一一四八—一二二七）、幸西（一一六三—一二四七）、証空（一一七七—一二四七）などをあげることができるが、彼らは、いずれも『選択集』の付属をうけ、自身の著作の中で自らが出あった本願念仏の仏法を「本願一乗」「弘願一乗」等と記すのである。そうであ

るならば、誓願一仏乗の開頭という課題において、親鸞がその眼に見据えていた言説の一つは、法然の教えを一乗の法として受け止める法然門下の教学であるという視点が成り立つであろう。

そこで、小論では、まず、教相判釈という視点から、法然が聖道門に対してどのような位置づけを行っているのかを明らかにする。その上で、法然門下の中でも、専修念仏の教えを一乗として言明する隆寛、証空、幸西について、彼らの教判における聖道門の位置づけを踏まえつつ、一乗の意義を考察していきたい。そして最後に以上の考察を踏まえ、『教行信証』『行巻』・一乗海釈における論述の仕方と言及しつつ、親鸞における「誓願一仏乗」究明の思想的文脈とその課題について考えてみたい。

一 法然の浄土宗立宗における教相の明確化

法然は、浄土宗立宗について

我立^一浄土宗^二意趣者、為^レ示^{サムカ}凡夫往生^一也。…中略…依^二善導釈義^一、興^二浄土宗^一時、即凡夫生^ト報土^ニ云事顕也。

と述べるように、「凡夫往生」「凡夫入報」の道理を、「選択本願念仏」「ただ念仏」として明らかにするという教学の確立が浄土宗を立てる意趣であると明示する。また、

聞^{カハ}言^ト浄土宗義^一者、可^レ思^フ定判^{ムト}教ノ権実^一亦^レ可^レ思^下廢^レ權立^レ実義^ヲ攬^ト上。

〔二期物語〕・〔法然全〕四四六頁

と語り、法然は浄土宗義についての言説を聞こうとするならば、浄土宗における「教の権実」を明確にする教相判釈を理解すべきであると述べる。

従つて、法然は、『選択集』の冒頭「教相章」に、道綽『安樂集』の文を引き、時と機に対する妥協なき吟味を通して、「速やかに生死を離れん」という課題にこたえる教えは、「聖道を捨てて浄土に入らしめん」という道綽の意によつてのみ明らかになるといい、また、『選択集』の帰結である「三選総結」の三重の廃立によつて、「選択本願念仏」に成り立つ浄土宗の教相判釈を明確にするのである。ただし、『選択集』において、「教の真仮権実」という表現そのものを見出すことはできない。

『選択集』は建久九年、法然六十六歳の時の撰述とする説が有力であるが、それより後に法然が撰述したものととして、伊豆山にいる門弟源延のために、建仁四年、七十二歳の時に撰した書物、『浄土宗略要文』（以下「略要文」と記す）がある。この書物の撰述時には、親鸞もすでに法然門下となつてゐるが、文字通り、浄土宗の独立を果たし遂げた法然が、その宗の要となる諸文を集め略記した書物である。この書物が注目されるのは、標章の文、經論釈の引用、そして私積（必要な場合のみ）という、『選択集』と同様の構成で書かれてゐるという点、内容は簡略化されてゐるが十七箇条を立て、『選択集』の十六章と構成的にも重なりあう部分が多いという点があげられる。しかも、『選択集』に言明されていない事柄に法然が言及している点で意義ある書物と考えられる。

その『略要文』の冒頭は、『選択集』と同様に、「道綽禪師の意による聖道浄土の決判」が明示される。次いで、第二には『選択集』には明示されない項目が掲げられる。

二 善導和尚意、云三釈尊出世本意、唯説二念仏往生_ヲ一之文

法事讚云。如來出_ニ現_{シテ}於五濁_ニ、隨宜_ノ方便_ヲ以_テ化_ニ群萌_一。或説_ニ多聞_{ニシテ}而得度_{スト}一、或説_ニ小解證_{ニシテ}三三明_一、或教_ニ福惠_ヲ双除_ト一障、或教_フ禪念_{ニシテ}坐_{シテ}思量_{セヨト}一。種々法門皆解脫_{スレトモ}、無_レ過_{タルコト}。三念仏_{ニシテ}往_{クニ}二西方_ニ一。上_ミ尽_シ二一形_ヲ一_一至_{マデ}二十念_ニ三念_ニ五念_ニ一、仏來_レ迎_シ玉_フ。直_ニ為_ニ彌陀弘誓_ノ重_ガ一、致_スレ使_{コトヲ}二凡夫_ヲ念_{シテ}レバ_一即生_セ一。

ここで法然は、釈尊の出世の本意を明かしている。釈尊がこの世に仏陀として現れた本意は念仏往生を唯説するためであったということを、善導の『法事讚』の文によって法然は明記する。『略要文』では、この文を引用しているにすぎないので、この『法事讚』の引文に込められている意義を別の文によって明確にしておこう。

或人問曰。善導和尚ノ意ハ、以_レ聖道ノ教ヲ為_トニ方便教ト一、出_テ在_リヤ何_レノ文ニ一。

師答曰。法事讚_ニ云。如來出現於五濁、隨宜方便化群萌。或説多聞而得度、或説小解證三明、或教福惠雙除障、或教禪念坐思量。種種法門皆解脫、無過念仏往西方_ト、已上 是也。難_シテ曰。已_ニ言_フ種種法門皆解脫ト一、何_ソ以_テ此_ニ文_ヲ一為_シヤニ方便ノ證據ト一乎。答曰。上_ニ云_フニ隨宜方便化群萌ト一、次_ニ云_フニ種種法門皆解脫ト一、至_テ下_ニ云_フニ無過念仏往西方ト一。明_ニ知_ス、念仏往生ノ之外皆為_{コト}ヲニ方便ノ説ト一也。〔二期物語〕・〔法然全〕四四八頁

法然は、念仏往生の教えこそ、如來がこの世に現れた本意を明かす教えであつて、聖道門を含むそれ以外の教えは方便の教説にほかならないという善導の教判を、この『法事讚』の文に見てとる。つまり、如來は五濁の世に出現して、さまざまな機縁に従つて、方便をもつて群萌を教え導かれた。そこで説かれた種々の法門は、みなどれも迷いを超える教えとして説かれたけれども、あくまでそれは方便の説にほかならない。それゆえに、善導は、念仏して阿弥陀の浄土に往生する道には及ばないと明言するのであると法然は言う。この念仏往生以外の教えはすべて方便であるという浄土宗の教相の明確化は、善導の『観経疏』「玄義分」の「序題門」および「序分義」の「化前序」に述べられる釈迦一代の教えの中の『観経』の位置づけと深く関わっている。つまり、善導における『観無量寿経』の位置づけが、この浄土宗における「教相判釈」を成り立たせている根本に存在するのである。もちろん、『観経』という經典への理解の仕方は、天台や法相などの宗とは全く相いれないものであることを法然自身、十分に自覚していた。しか

し、法然は

此觀無量壽經^ハ、若依^ニ天台宗^ノ意^ニ爾前教也。故成^ル法花方便^ト。若依^ニ法相宗^ノ意^ニ者成^レ演^ニ別時意^ヲ。然^ニ依^ニ淨土宗^ノ意^ニ者一切^ノ教行^ハ悉^ク成^ニ念仏^ノ方便^ト。〔一期物語〕・〔法然全〕四四七頁

と述べて、淨土宗の教相に明確に立つならば、聖道門などの念仏往生以外のすべての教えは方便の教えにほかならないと言ひ、いわゆる「聖道門方便説」と言ひうる態度を鮮烈に打ち出しているのである。

法然には、このように聖道門に対する非常に鋭い教相判釈がある。しかし、この聖道門方便説と、善導の「我依菩薩藏頓教一乘海」の文が示す一乗の仏法の實現とを積極的に関連づけていくような表現を法然はしない。むしろ、法然が一乗といひ一乗といひ時、それは聖道門の一部であり、それがどれほど深く探求され思索されても教理としてのみ語られるのであれば、今ここに生きる凡夫を迷いから超えさせる教えとはならず、結局空過を繰り返していくしかない、という悲歎を込めた用例がほとんどである。⁵⁾

しかし、善導の積義によつて、積尊の出世本懷の教えは念仏往生一道であると確かめる法然の教相判釈を考えると、『観経疏』「勸衆偈」で「我依菩薩藏頓教一乘海」と明記する善導の思想を拠り所として、聖道の教えを押し並べて方便の教えであると言いきり、なおかつ一乗の仏法を成就する法として本願念仏の教えを開顕するその方向性を、法然の教学そのものが指し示しているのは確かである。

そのような法然の示唆した方向を受け止め明らかにしようとした門弟に、親鸞のみならず、隆寛、また証空、幸西などがある。彼らは、法然の選択本願念仏の教えに基づく法然の廃立の思想を受け、更に専修念仏の教えこそ一乗の法と言ひうる教えであることを、それぞれの課題の中で明らかにしようとするのである。

二 法然門下における教相判釈と「一乗海」への言及

それでは次に、法然門下の教相判釈における聖道門の受け止めと、本願一乗の法を究明する内容を見ていきたい。

法然門下の上足と自他ともに認める人びとのうち、弁長（一一六二—二三八）と長西（一一八四—二六二）は、聖道門と浄土門の得道を認めつつ、しかも聖道門を以て仏教の本流とし、浄土門は聖道門の修行に堪えない者のために特別に開かれた所の支流と捉えている⁶。ここには、法然が非常に鋭く表現した聖道門方便説は影を潜めているといわざるを得ない。従って、ここで取り上げることとはせず、先述した隆寛、証空、幸西について、取り上げていきたい。

天台宗の僧であつた隆寛は、自身の歩む道として浄土の教えに帰入した人であり、同時に、法然滅後、嘉祿の法難においては専修念仏の「張本」として流罪に処されている。現存する彼の著作の中から明確な教判を見出すのは難しいのであるが、『極楽浄土宗義』を見ると、浄土宗の名義を明かすところで次のように述べている。

結^ニ浄土宗ノ名義^ヲ一者、此ノ中^ニ有^ニ一者聖道ノ諸宗^ニ者浄土ノ一宗^{ナリ}初^ニ言^ニ聖道ノ諸宗^ト一者真言仏心天台花嚴三論法相地論撰論俱舍成実大小ノ戒律等惣以名^ニ聖道教^ト一；中略[：]安樂集云其ノ聖道ノ一種今ノ時^ニ難^ニ證^ニ一；中略[：]已上聖道門難^ニ修^ニ難^{コトヲ}二證^ニ一自他同ク所知也浄土門者専帰^ニ他力之願^ニ所^ハ望^ニ一是浄土也道綽^ニ云^ニ今末法是五濁惡世^{ナリ}唯^ニ有^ニ浄土一門^ニ可^ニ通入^ニ一路^{ナリ}是以諸仏ノ大慈勸^テ歸^{シム}ニ浄土^ニ一

〔隆寛全〕一巻一二—三頁

隆寛はここで、浄土宗の名義を結ぶとして、『選択集』の第一・教相章に引用される『安樂集』の文を引きながら、五濁の世を生きる道俗に、ただ浄土の二宗のみあつて迷いを超えていく通路となると明言する。隆寛の残された著作の中に、法然ほど明確な聖道方便説は見られないが、彼は『選択集』教相章で記される法然の教判に従って「浄土宗の義」を明らかにし、その浄土宗の義に生きた念仏者であることは間違いない。

では、隆寛は一乘法についてはどのように述べているのか。先ほど触れた『極楽浄土宗義』で隆寛は浄土宗の教相について、七つの項目を立てる。その七つを抜き出すと以下のようになる。

第一簡「異声聞藏」名爲「菩薩藏」

第二簡「異聖道門」名爲「浄土門」

第三簡「異小乘」名爲「大乘」

第四簡「異五乘」名爲「一乘」

第五簡「異漸教」名爲「頓教」

第六簡「異難行」名爲「易行」

第七簡「異自力」名爲「他力」

ここで隆寛は第四に「五乗を簡易して名づけて一乗と為す」と示す。つまり、浄土宗は一乗の法であると言明し、更に「一乗」と「五乗」について次の問答を展開する。

疑云既云「五乗齊入」不^ル限^ニ一乘^ニ乎 会云以^テ本願^ヲ為^ニ一乘^一於^ニ五乘^一者所化ノ種類也全^ク以^テ所化ノ機^ヲ

不^レ四^ノ可^レ難^ニ能為^ノ願^ヲ一以^テ他力^ヲ撰^ス衆機^ヲ豈^ニ非^ス本願^一乗ノ功力^ニ哉 (『隆寛全』一巻一一九頁)

彼は、善導の「五乗齊入」という時の五乗は「所化機」であって、浄土宗における「一乗」とは、あらゆる機を撰取する本願一乗の功力を指すと述べる。隆寛が、本願一乗の内実をどのように受け止めていたのか、資料の制約のため詳細に知ることは出来ないが、法然の現存する著作には明言されていない「本願一乗」という表現が隆寛に存在すること、そしてそれが浄土宗の教相として掲げられているということは、注意すべきである。

次に、証空について触れたい。証空は聖道門と浄土門とを巧みに融会して仏教全体をすべて浄土の教えとする教判、

いわゆる行門、観門、弘願という独自の名目を立てて、一代仏教の教相を分ける。その概略をおさえると、「行門」とは釈迦一代の自力聖道門の教えであり、「観門」とは凡夫出離の実道「観経」の十六観を指す。「弘願」とは、「観経」十六観を指す観門が説きあらわそうとしている教え、つまり一切善悪の凡夫を齊しく救済する弥陀の本願の教法をあらわしているということになる。

証空は『観経疏大意』の冒頭で、次のように述べる。

念仏宗とは、諸経を会して観経に入るるなり、諸善を開して念仏に摂す。定散相分かつこと八万四千、能く念仏の一行を詮す。弘誓多門四十八、専ら念仏の一願を標す。諸善を能詮と号し、念仏を所詮と名づく。此の分別の智を以て観解と名づく、十六観門是なり。此の観門の智を発して弘願に帰す、念仏三昧是なり。能詮・所詮は猶分別の義、観門・弘願は開会の釈なり。此の四の道理は相離れざる法なり。

〔西山上人短篇鈔物集〕 五頁

つまり、釈迦一代の聖道の諸経は「観経」に入り、更に『観経』十六観門はすべて弘願をあらわすとともに、弘願念仏に帰入させる教えであるとする。また、ここで証空は「弘願観門開会の釈」を示している。これは、弘願正因の法に帰す所に、観門は単に廃されるのではなく、機に応じて説かれた正行として位置づけられるという内容を指す。証空は聖道の諸行を、弘願念仏の正因が成就するまでは、廃立を以て、歩むべき仏道として選びすていくのである。弘願の正因が成就した後では、開会の釈を以て、すべての行がその意義を取り戻すという教相に立つのである。

このような教判を踏まえて、「一乗」についての証空の理解を確かめていきたい。

彼は、善導の『観経疏』に記される「一乗海」を次のように釈す。

一乗海等^{ト云}事。一^ト者無^二義也。乗^ト者運載荷負^ノ義也。譬^ハ如^ク下^レ乘^{シテ}一^ノ船^ニ萬人渡^カ上^レ海^ヲ。乘^{シテ}一^ノ願力^ニ。善惡凡夫齊^ク往^ク生^{シテ}極樂^ニ。故以^テ弘願^ノ一行^ヲ一^ニ乘^ト一^也。〔観経玄義分他筆鈔〕〔西山全〕第四卷二七一頁

ここで証空はまず、「一乗海」の一乗とは、唯一の願力に乗じて、善悪の凡夫が斉しく浄土に生まれること、つまり「弘願一行」のことであると言う。また『観門要義』では、一乗について

一乗_ト者_レ從_リ因_至果_ニ。直_ニ乘_{シテ}彌陀_ノ願_ニ終_ニ顯_ス法身_ノ德_ヲ中間_ニ無_シ二_ノ乘_一故_ニ云_フ一_乗ト。

(西山全 第三卷二二頁)

と述べ、この身において出離生死の因となり、ついに仏果である法身の徳を開くのは、本願に乗じる道があるのみであり、その間に本願以外の教え(二の乗)は必要ないことを、一乗というのであるとする。

このように一乗の意義を明かす証空は、次のような問答を展開する。

問曰。諸教ノ習_レ。一乗_ト者。佛乘_也。佛乘_ト者。實相ノ理_也。實相ノ理_一。凡聖無_シレ隔。仍_テ一乘_也。今ノ法華_ニハ十方_ノ佛土_中。唯一_ノ乘_法云云。勝鬘經_ニハ。大乘_ト者。即是_レ佛乘_{ナリ}。是_ノ故_ニ三乘_ハ即是_レ一乘_{ナリ}云云。此等ノ諸經_ハ皆以_ニ實相_ノ一理_ヲ一云_ニ一乘_ト一。今師何_ヲ以_テ弘願_ノ一行_ヲ一立_玉一乘_ト一。若_シ弘願_ヲ立_ニ一乘_ト一。又許_ハ三_ノ實相_ヲ立_ニ一乘_ト一。二乘_ノ謂_ニシテ。一乘_ノ義破_シナシ。云何。

(『観経疏他筆鈔』・『西山全』第四卷二七一頁)

この問答は要するに、諸教において一乗は「実相の理」つまり諸法実相の理を言うのであって、「弘願の一行」を一乗と立てることは決してない。敢えて弘願を一乗と言うなら、諸法実相の理と並立して、二乗を立てることになつてしまい、一乗の義を破してしまうことになるのではないか、という問いである。これに対し証空は次のように答える。

答曰。如_レ此經論ノ說非_レ一_ニ。仍_ニ法華涅槃勝鬘經_ニハ說_ク一乘_ヲ。般若等_ニハ說_キ二乘_ヲ。楞伽經_ニハ說_ク二五乘_ヲ。

說_ク二乘_ノ數_ヲ非_レ一_ニ。一乘_ノ體亦可_レ異_{ナル}。仍_ニ涅槃經_ニハ云_テ一切衆生悉有佛性_ト一顯_シ一乘_ヲ。法華_ニハ說_ク三乘

即_ニ一乘_ト一。勝鬘經_ニハ說_ク唯對_{シテ}二一人_ニ一乘_ノ謂_レ上_ヲ。或_ハ以_レ心_ヲ云_ヒ二一乘_ト一。或_ハ以_レ佛性_ヲ云_フ二一乘_ト一。聖道_ノ

諸教。一乘_ノ體異_{ナル}也。淨土教_ニ所_レ立_{ツル}一乘。何_ヲ同_{ラシ}レ彼_ニ哉。(『西山全』第四卷二七一―二頁)

この応答で、証空はまず諸經に一乘、二乘、五乘など様々な教えが説かれ、一乘を説く經典であつても、一乗の体は様々であることをおさえる。このことを踏まえて、浄土の教えが立つ所の一乗も、諸經に説かれる一乗と異なるのは当然であると証空は結論する。その確認の上で、証空は

又彼諸教ニ所レ説ク一乘ノ體。離ニ今ノ一乘ヲ一不レ可レ立。所謂一乘ニ可レ有ニ正因正行ノ二意一正因ノ謂レテ諸教ニ所レ立ツル一乘ノ體。即顯シテ二報佛別願之功德ヲ一成スニ名號得生之道理ヲ一是則法性眞如海等三身。共ニ入テ今ノ報佛ノ位ニ顯スニ法界身ノ謂ヲ一。

〔西山全〕第四卷二七二頁

と記す。ここで言われる諸經とは、先述の涅槃經、法華經、勝鬘經であるが、それらに説かれる一乗の体は、弘願の一乘を離れては成り立たないと証空は述べ、そもそも一乗は正因と正行という二つの意義に分けて理解すべきだといふ。一乗の正因に関して言うなら、一乗とは、すべて阿弥陀の本願の功德に顕れ、本願の名号があらゆる衆生を善悪、凡聖等の区別なく得生させる道理に成り立つのであると共に、諸仏もまた、本願に報いたる阿弥陀仏の位に入つて、あらゆる衆生に遍満する法界身のいわれを初めて顕現することができるといふ。このように一乗の正因は、本願念仏以外にはないと言つて、更に次の言葉が続く。

此上ニ正行ノ面隨テレ機ニ説コト一乘ノ位ヲ一不同ナルベシ。知ニ此謂ヲ一云フニ一乘ト一。強ニ不レ可レ貴。云テニ三乘ト一。不レ可ニ卑下ス。仍テ法相宗ニハ云ヒニ一乘方便ニ乘眞實ト一。法華ニハ云フニ一乘眞實ニ乘方便ト一。此位ニテ意得ル時ハ。弘願ノ一行モ居シテニ第六受法ノ位ニ一。眞實ノ凡夫出離之行ナレトモ。正行ノ謂レ隨レテニ經經ニ一論スルニ一乘ノ體ヲ一時ハ隨レ機ニ暫ク不同也。能能可ニ尋知一。

〔西山全〕第四卷二七二頁

証空の教学においては、正因と正行という名目も独自の意味において用いられるが、およそ正因とは安心・平等の側面を、また正行は起行・差別の側面を指す言葉である。先の引用で証空は弘願の一行のみ有りて生死を超える道と

明かし、正因を踏まえた正行においては、機に従って諸経は説かれるのであるから、機に應じて一乗の位の説かれ方も違ふのであるという。より具体的に言うならば、一乗といつても強ちに貴ぶべきでなく、三乗といつても侮るべきでなく、弘願の一乗を正因と明らかにした上は、教えが説かれる機に従って、それぞれに意義を有するのだということになる。

以上をまとめると、証空は実際の求道に関して、すべての衆生が斉しく生死を超える一乗の正因は弘願の一乗にはかならないと説く。但し、弘願観門の開会を説き、正因正行の二つの意をもつて、弘願一乗の意義を明らかにする証空は、一乗の正因を成就した上は、あらゆる教、あらゆる行が、機に従って、様々に説かれ、一乗の意義を明らかにする際にも、諸経に明かされる一乗、三乗の教えはそれぞれに説かれる意義を持つと述べる。証空の教学を見る場合、聖道門、特に天台教学との関係性が常に取りあげられるが、「弘願一乗」と述べる証空の視座もまた、天台教学の開会という思想との連関をどのように捉えていくかが課題となる。つまり、一乗の理を諸法実相と言い、一乗の正因は弘願一乗にほかならないと踏まえた上で、正因正行の積をもつて、一乗といつても三乗といつても強ちに言葉に左右されて貴んだり蔑んだりしてはならないという言葉は、一方では証空の思想全体、更には証空の課題や状況、当時の思想との関わりにおいて、その意義を考察しなければならぬが、明らかに親鸞と一線を画す「一乗」究明の姿勢であると言える。『法華経』を引用しないという親鸞の姿勢は「一乗」を明らかにする箇所においても一貫している。とすれば、誓願一仏乗開顕にあたって、法然の明らかにした専修念仏の仏道を受け止める視座を課題的に吟味させる具体的な内実の一つが、証空の言説であったと考えるとよいのではないだろうか。従って、善導の著作を一貫した独自の思想で捉え理解し、仏教思想の一つの精華である天台教学を背景として本願念仏の仏道を究明しようとする証空の「一乗海」への言説は、その課題的な点も含めて、親鸞の眼前にあった教学大系の一つと見ることができよう。

次に、法然が明らかにした本願念仏の仏法を「凡頓一乘」という独自の思想によつて展開する幸西について見てきたい。

まず、教相について、幸西は、『略料簡』（凝然著『浄土法門源流章』所引）において次のように述べる。

学法有_三九十六種道_一。東為_レ二。九十五種外道。一種仏道。仏道有_二八万四千門_一。亦為_レ二。声聞藏菩薩藏。菩薩藏有_レ二。漸教頓教。頓教有_レ二。聖頓凡頓。聖者十聖。凡者五乘。今我依_三菩薩藏頓教_一者。正為_二凡頓教_一也。

〔大正藏〕八四卷一九六c)

ここで幸西は、善導の「我依菩薩藏頓教」という表現に、九十五種の外道に対する仏道を選びとり、仏道・八万四千の法門を声聞藏と、菩薩藏の中の漸・頓二教に分けて、漸教を捨て頓教に立ち、更に頓教中、十聖（十地の菩薩）のために説かれた聖頓に対して、凡夫に説かれた凡頓教に依止すべきであるという教判を見てとる。この「聖頓」と「凡頓」について、更に『略料簡』の偈頌（『浄土法門源流章』所引）に

对_三聖凡二頓_一。採_レ凡為_三正門_一。积迦為_レ凡出。唯説_二頓一乘_一。

〔大正藏〕八四卷一九七a)

と、幸西は記して、凡頓一乗こそ、积迦の出世本懐の教えと示す。つまり幸西にとつて、凡頓一乗以外の八万四千の法門はすべて方便の教えということになる。このことを『玄義分抄』では端的に

定散トイハ諸經即八萬四千調機門也弘願トイハ大經別意究竟ノ眞門也

〔日大藏〕九十卷三七六頁

と表現し、先ほど八万四千の漸教頓教を、ここでは『觀經』所説の定散の要門に摂めて、『觀經』に説かれる定散の教えは、諸經に説かれる八万四千の法門が、すべて機を調えるための法にすぎず、弘願の教え（凡頓一乗）のみが究竟の眞門であつて、それ以外は弘願一乗に導くための方便だと明言するのである。このように、幸西の教判は、聖道門（聖頓）と浄土門（凡頓）との位置を完全に逆転させて、聖道を権方便の浅薄なる教えとし、浄土の一門（凡頓一乗）

のみが仏教における甚深真実なる教えであり、従つて、凡頓一乗のほかに眞の成仏道はないという、鋭い廢立を内実とするのである。

では、徹底した廢立によつて幸西が明かす凡頓一乗の法とはどのようなものか。

幸西は、『玄義分抄』において次のように述べる。

當教〔觀經〕：筆者註 二正ク一乗ノ義アリト云ハ一乗トイハ弘願弘願トイハ南无阿彌陀佛南无阿彌陀佛トイハ

念佛三昧念佛三昧トイハ佛智即大乘廣智也群萌ヲ運載シテ廣ク生死ヲ出ス是レ諸佛ノ無上ノ智慧眞實ノ大乘也

〔日大藏〕九十卷三八二頁

幸西は『觀經』が明かす一乗の義は端的に言えば『大經』所説の弘願の法であるが、それは一切の群萌を南無阿彌陀佛の名をもつて広く救い、あらゆる區別を問うことなく、生死を超えた彼岸の世界に渡す仏智つまり大乘廣智にはかならないという。さらにその弘願一乗の仏智こそ、諸仏を諸仏たらしめる無上の智慧であり、一切の衆生を無始よりこのかた生死から超えさせつづけている眞実の大乘であるとする。つまり、幸西の言う凡頓一乗は、仏智を内実としており、それはとりもなおさず弘願を建立し南無阿彌陀佛の名をもつて衆生を救わんとする本願の智慧（智願）である。

更に、幸西は仏智の一乗について、

覺行窮滿ノ无縁ノ慈常没ノ衆生ヲ攝シテ報身常住ノ土ニ生セシメムカ為ニ大乘廣智ヲ顯開ス其ヨリ已來過去現在

ノ諸佛菩薩此ノ大乘ニ運載セラレテ生死ノ苦海ヲ度ス入聖得果ノ道无始已來唯此ノ一乗ノミ有テ无ニ也故ニ上從

海德初際如來乃至今時釋迦諸佛皆乘弘誓勸念彌陀此ノ義ヲ以テノ故ニ如來出世ノ本意顯ニ別意ノ方便ヲ開示シテ

隱ニ一乗ノ眞門ニ悟入セシム

〔日大藏〕九十卷三九三頁

と述べ、あらゆる衆生を迷いから超えさせんとする無縁の慈悲こそが、常没の凡夫を撰取して、無漏の報土に生まれさせるために、大乘広智を開顕したのだと展開する。その上で、久遠劫より、あらゆる諸仏菩薩が生死を超えていくことができたのはすべてこの大乘広智にのみ依るのであり、「無始已來唯此の一乗のみ有て無二也」と言い切るのである。ここに幸西における仏智の一乗、弘願の一乗のもつとも鮮烈な表現を見出すことができる。

しかも幸西は、この大乘広智が衆生の一念と団体であることを究明して、「略料簡」(『浄土法門源流章』所引)に、

言「一乗海」者。法輪雙標也。一乗者。即弘願。弘願即佛智。佛智即一念也。海者如「衆流入」海。一切善惡凡夫皆歸「彼智願海」得_レ生也
 (『大正藏』八四卷一九六c)

と述べ、一乗とは弘願の法であり、その弘願の法はとりもなおさず仏智であり、その弘願一乗の仏智が「一念」にはかならないと述べる。

幸西は、法然門下にあつて、「一念義」を立てた祖であると言われるが、その抛り所は「信をば一念に生るととり、行をば一形にはげむべし」という法然の思想であり、そこでの「信をば一念に生る」という意義を徹底させていく教を明らかにしたと言えよう。つまり称名の一念を往生の因と決定する信の發起する時、現生に不退転の利益を得て、報土に往生することができると言えよう。つまり「一念」の意義の明確化ということである。幸西は果たしとげようとするのである。⁹⁾

幸西においては如来の智慧によつて選択された南無阿弥陀仏は、一切の衆生をあまねく斉しく迷いから越えさせていく一乗無上の法なのであり、それは如来の大慈悲によつて顕開された仏智・大乘広智の具現にほかならないということになる。その仏智・大乘広智が報土往生の因として衆生に南無阿弥陀仏の一念となつて現れること、それを幸西は「一乗者即弘願弘願即佛智佛智即一念也」と言うのである。従つて、この弘願の一乗に乗ずる仏智の一念こそ三界に沈むあらゆる衆生の出離の道であり、しかも弘願一乗以外に諸仏を諸仏たらしめる智慧の開顕はありえないのだか

ら、文字通り、ここに凡頓一乗、仏智の一乗が明かされるということができよう。

このように一見、親鸞の思想と非常に深い連関を見出すことができるような思想が幸西には存在する。確かに幸西の思想は念仏往生、念仏成仏の教えを拠り所にし、師法然の『選択集』の思想における安心門の内実を廃立という方法によって徹底していく教学であるといえることができる。

けれども親鸞は積極的に幸西について語ることはなく、親鸞自身が書き残したもののうち、親鸞と幸西との接点を示すものは次の三点と考えられる。

まず第一に、幸西撰述の『唐朝京師善導和尚類聚傳』に関連する「烏龍山師并屠兒寶藏傳」を親鸞自ら書写し書き残していること。第二に、『西方指南鈔』の「七箇条制誡」中、「二百余人連署」した名前のうちから、法然上人を含め二十三名をのみ親鸞は書写するのであるが、その中に幸西の名を見出すことができるということ。そして第三に、幸西の弟子と言われる光明房がと見える一念往生の義を「言語道断」と批判する法然の消息を、『西方指南鈔』に書写していることである。これらの接点を踏まえると、誓願一仏乗を開顕する課題の中で、幸西の法然教学に対する受けとめと、幸西の教学の展開に対して、親鸞は凝視と吟味批判という思想的営みを共に行っていたのではないかと考えられよう。幸西と親鸞との思想的連関について、比較や影響関係の指摘はこれまでも、様々になされてきた。そのような指摘を踏まえて、彼等の課題や思想的な緊張関係にまで踏み込んで考察する究明は、いまだ十分には展開できておらず、これからの課題となる。特に、親鸞には最晩年まで手を入れ続けた自筆『坂東本・教行信証』が存在する。そこに確かめられる思索の跡を厳密に確かめつつ、思想的な課題と展開を浮き彫りにするために、親鸞の眼前にあった法然門下の思想的営みを視野に入れて研究を進めることは不可欠のことであると考える。

以上、三人の法然門下の教判と弘願一乗の究明の内容を見てきた。

誓願一仏乗を開顕する親鸞にとつて、法然が興隆した本願念仏の教えとの値遇と、それに対する責任と謝念という契機が最も重いものであるということはいくら強調しても、しすぎることはないほど重要であるが、そのみならず、法然の思想的課題を受け止める門弟たちが選択本願念仏の教えを一乗の教法として考究していく教学の営みがあつたことも看過されてはならない意義を持つと私は考える。この法然門下の思想的な状況を見据えつつ、「一乗海」という言葉に明らかにされねばならない事柄への推究が「行巻」一乗海釈に展開されるのである。それは、親鸞の徹底した信仰表白であるとともに、「論義の書」としての『教行信証』という内容を浮き彫りにする。このことを「行巻」一乗海釈における親鸞の究明の姿勢という点で最後に考察してみたい。

三 「一乗海」を究明する親鸞の姿勢

親鸞には、その壮年時代の教学研鑽の一端を知ることが出来る『観阿弥陀經集註』という書物がある。そこには、ほぼ善導の著作を指南としながら、『観經』、『阿弥陀經』の意を明らかにしようとする親鸞の思索の姿が見出される。それは親鸞が法然門下において学んでいくなかで、師法然が自ら「偏依」と言い切つた善導の思想を明確にし、それを抛り所にしながら、『観阿弥陀經』の意義を明かにする営みであると言える。

『教行信証』において親鸞は、善導の思想の更なる根底を、『涅槃經』や『華嚴經』などの大乘經典、浄土の祖師の著作や、そして「浄土三部經」、殊に『大經』に説かれる本願の教説に遡つて明らかにする。それは、法然門下において様々に議論され究明されてきた善導の思想的意義の淵源を尋究し、法然と法然門下における善導教学の究明に一つの応答をなしていくものとも見ることができよう。

これまでの内容を踏まえて、善導の「一乗海」という教言を究明する親鸞の基本的な態度が何を私たちに明かそう

としているのかを最後に考えてみたい。

「行巻」一乗海釈について考える時、まず注意しなければならないのは「行巻」の展開である。「行巻」はその題号が示すように、「浄土真実行」を顕かにすることを課題とした巻である。その「行巻」で親鸞は、究明すべき名号の内実を真如一実の功德を極速円満する大行として、さらに本願招喚の勅命として明確化し、第十七願・諸仏称名の願に基づき、釈尊から日本の高僧たちに至るまで、歴史的に証されてきた教言を刻み記していく。そのことによって、親鸞は「行巻」に「斯乃顯^ス眞實^ニ行^ヲ明證^{ナリ}」と言明し、一旦「行巻」の題号に明記された課題への応答を終えるのである。

しかし、親鸞は「真実の行を顕す明証」を確かめ終えた所で「行巻」を終えずに、さらに

言^フ他力^ト者^ハ、如來^ノ本願力也

(定親全 一卷七一頁)

から始まる他力釈を展開し、続いて「言一乗海者」¹²から始まる一乗海釈を著わしていく。「行巻」御自釈のそれまでの文脈のなかで「言^フ者」という形で文を記す時は、名号釈や行の一念釈において「言發願回向者」¹³「言必得往生者」¹⁴「言行之一念者」¹⁵と記すように、重要な言葉の内実を親鸞自身が明確にしようとする際に使われる文章の形式である。つまり、既出の言葉を直接受けて、その意義を明らかにするときに御自釈に用いられる表現が「言^フ者」だということになる。それに対し、この「行巻」他力釈および一乗海釈は、その直前で「行巻」における課題の区切りを明確につけた後に述べられており、具体的にそれ以前に出てきた言葉を直接受けての確かめというより、他力や一乗海という言葉のもとに親鸞が明らかにしておかねばならないことを改めて展開していく箇所と見ることができ。殊に「一乗海釈」に関しては、「行巻」のそれ以前の箇所に「一乗海」という表現が出てこないのにも関わらず「言一乗海者」という言葉から「一乗海釈」をはじめていることは注目される。このような事実から、他力釈・一乗海釈における論

述は、真実行を顕す明証を確かめきつたからこそ、明瞭にしなければならぬ「他力」「一乗海」の内実を明かし、「行巻」の課題を更に展開する不可欠な箇所として、捉えねばならないのではないかと考える。

更に、この「一乗海」という表現は先述したとおり、法然の浄土宗立宗以後その門弟によって大きな課題となった重要な概念であり、「弘願一乗」の究明に直接かかわる教言である。そうであるならば、「行巻」の一乗海釈とは法然門下における教学の受け止めと展開、更には法然教学に対するさまざまな批判、吟味を凝視しつつ、法然の浄土宗立宗によって明らかにされる一乗の具体化を「誓願一仏乗」として明確にする箇所と言っているのである。ここでは、一乗海釈の言葉そのものを取り上げることができないが、親鸞における「誓願一仏乗」究明の思想的文脈とその姿勢について最後にまとめておきたい。

一、親鸞を含めて、法然門下における「本願一乗」の究明は、善導の、『観経疏』『勸衆偈』の文「我依菩薩藏頓教一乗海」の教言を明確化するという課題と深く連関して、展開されていく。

二、『法華経』および天台教学に言及する証空と幸西において、証空が開会釈と正因正行という独自の概念を援用して一乗の意義を明かすのに対し、幸西にはその傾向が全くなく、特に廃立の意義を強調していく。

三、法然門下における「本願一乗」の究明は、特に証空、幸西が積極的に『法華経』あるいは天台教学を背景にし、或いは換骨奪胎して用いるのに対し、親鸞は『法華経』について全く言及や引用をせず、自覚的に距離を置いている。

ここにまとめた項目は、なぜこのような基本的視座の違いが存在していくのか、この違いが一体何を語り告げているのかという問いを浮かび上がらせる。

この問いに正面から取り組むことによつて、親鸞の一乗開顕の質が改めて浮き彫りにされ、同時にそれは法然と親

鸞の値遇によって明かされる真宗とは何であるかを開顕する重要な視座となるということができよう。

おわりに — 「論義の書」としての『教行信証』 —

法然在世中から滅後にかけて、法然が掲げた専修念仏の教えは、外には朝廷や幕府、大寺院からの非常に激しい弾圧を受けた。また比叡山や興福寺の学僧、更には聖道門の真摯な仏教者の代表とも言うべき明恵からの思想的な批判が投げかけられた。それだけではなく、内部において一念、多念などの争いや造悪無碍などの異義も繰り返し引き起こされてくる状態であった。その内外それぞれの状況に対し、親鸞は、法然の教えを『教行信証』において、どのように明かし語り伝えようとしていったのだろうか。およそ『教行信証』という書物は、法然教学の護教のための書でもなければ、思弁的に法然の教えを証明する弁証の書でもない。と同時に、内外からの弾圧、誹謗、論難の中で一貫して法然の真宗興隆の意義とその道理とを憶念し、明らかにしつづけようとした書物であると考ええる。

小論においては、法然の門下にあつて、隆寛、証空、幸西のように本願一乗、弘願の一乗という表現を用いて選択本願念仏の教えが一乗という名に値する内実をもつことを具体的に推究していく教学を考察したが、それは『教行信証』に「誓願一仏乗」として言明される親鸞の思想を明かす問いの「場」を開くためである。

「論書」としての『教行信証』への明確な視座の提示は、更なる厳密な、そして具体的な考察が必要であり、小論において十分に論ずることはできていない。しかし、親鸞が『教行信証』を撰述し、その晩年に至るまで筆をいれつづけ確かめ続けた思想的営みが、どのような思想的緊張関係の中で、どのような課題を明らかにせんとして、なされているのかを考究するとき、真宗を開顕するための「論義の書」としての『教行信証』の具体性も浮き彫りになるのではないかと考える。

註

- (1) 『定親全』 一卷三八〇頁。
- (2) 『定親全』 一卷七六頁。
- (3) 「亦」は、『法然全』の本文では、「者」であるが、ここでは『法然全』脚注の指摘に従った。
- (4) 「攬」は、『法然全』の本文では、「言」偏に、「覽」であるが、ここでは『法然全』脚注の指摘に従った。
- (5) 拙稿「親鸞における一仏乘開顯の視座―法然と、貞慶・良遍を通して―」(『親鸞教学』八九号) 参照。
- (6) 安井広度著『法然門下の教学』二八九頁 参照。
- (7) また、同様の意義を示す言葉が『観経疏大意』の次の文にも見出すことができる。
 一乗と云ふは、凡夫の初心より仏果の極位に至る中間には二乗無し。故に一乗と名づくるなり。今、念仏宗は、此の弘願に乗じて、凡夫より仏果に至る、蓋し此の謂れか。
 (『西山上人短篇鈔物集』二八―九頁)
- (8) 『観門要義鈔』で、証空は、「法華」一乗、所證理也。弘願「一乗、能證」人也。」(『西山全』三卷二十二頁)と述べ、法華の言う一乗は、諸法実相の理を示し、弘願の一乗は、それを証する人(仏)を明らかにし、弘願の一乗を離れては、一乗の法は具体的に実現しないという。
- (9) 幸西は『玄義分抄』に次のよう述べる。
 當知乘願ハ不退往生ハ安樂證彼無為之法樂ハ初地既生彼國更無所畏長時起行ハ萬行圓備果極菩提ハ佛果也…中略…入正定聚トイハ一念ヲ指ス也
 (『日大藏』九〇卷三九〇―一頁)
- ここで幸西は、本願に乗じたその時に不退転が成就し、正定聚に在るのは現生において一念が成就することによってであることを明示している。
- (10) 『定親全』 五卷一七一頁。
- (11) 『定親全』 一卷七一頁。
- (12) 『定親全』 一卷七六頁。
- (13) 『定親全』 一卷四八頁。
- (14) 同右。
- (15) 『定親全』 一卷六八―九頁。

凡例

一、漢文における送りがな返り点は、読みやすさを考慮して、補訂した箇所がある。また、明らかな誤記は訂正した。

一、主な引用文献は以下のように略記した。

『大正新修大藏経』↓『大正藏』

『改訂増補日本大藏経』↓『日大藏』

『昭和新修法然上人全集』↓『法然全』

『隆寛律師全集』↓『隆寛全』

『西山全書』↓『西山全』

『定本親鸞聖人全集』↓『定親全』

(本学講師 真宗学)

〈キーワード〉証空、幸西、誓願一仏乘